

没後68年の亡父の名をネットで発見！！

～98年前に剣道で全国優勝～

7組 山本 哲照

在広島の元同僚との交流

私は今、広島市に住んでいる会社で同僚だった人と電話やEメールで頻繁に交信しています。人生末期の侘びしい独居生活をしている私には誠にありがたい話し相手なのです。独特の広島弁で訥々とした話しぶりで心がほんわかとしてきます。年は私より3、4歳年長ですが、入社したのが1964年（昭和39年）の同期でした。会社の業務や行事などで度々顔を合わせているうちに親しくなりました。この人は**剣道が趣味**で若い頃から稽古を積み今は5段の腕前だそうです。



写真は私が大学卒業後入社した日刊工業新聞社の入社式（1964年4月1日）の時のものです。前列に役員・支社長・各局長。私は座っている人の右から4人目（専務）の後ろに立っています。広島の人もこの中にいます。

小田高で剣道部に入部

実は私にも剣道に打ち込んでいた時期があったのです。城山中学3年の時当時本町小学校の隣にあった「**文武館**」（現・小田原スポーツ会館の前身）で剣道を始めました。何故剣道なのかと言うと私の父は神奈川県警小田原署の警察官で剣道の高段者（確か5段か6段で練士）でした。流派は「**小野派一刀流**」

で若い時には明治神宮で行われた大会で**全国優勝**したことがあると聞かされて
いました。事実我が家の神棚にはその時の表彰状が飾られていました。大会の
名称はうろ覚えですが「**明治神宮競技大会**」で賞状に書かれた「**内務大臣 若
槻禮次郎**」という名前は今でもはっきり覚えています。この父の影響で私も何
となく剣道を始めたのでした。道具類は全て父が所有していたものを借りたの
で新しく買いそろえる必要がないどころか、私が持ち込んだ防具（面、胴、小
手）などを見て文武館の指導者たちは「どうして初心者の子供がこんな立派な
防具を持っているのか？」と驚いていました。小田高に入学してすぐに**剣道部
に入部**しました。その時一緒に入部した1年生は**芹澤茂夫**さん、**柳川一郎**さん、
須山徹さんなど。私は当時の運動部ではごく当たり前だった「先輩は神様」と
言う気風になじめず、1年だけで退部してしまいましたがこの3人はそのまま
剣道部に残り、全員有段者になりました。ただ残念ながら今では3人ともすべ
て鬼籍に入ってしまった。

広島の「剣豪」と交信しているうちに私が城山中3年生時に亡くなってから
ほとんど考えることもなかった父のことがしきりに思われるようになり、父の
ことを少し調べてみることにしました。

父の戸籍を調べる

私の父は生まれた時の名は「**高橋文吾**」。父・高橋太右衛門、母・かつの四
男として宮城県桃生郡須恵村（**現・石巻市**）の農家で**明治20年**（1887年）
11月30日に生まれました。当時は家を継ぐのは「長男」で次男以下は全て
家を出なければ生きていけない時代で、父も例外ではありませんでした。横浜
の山本家の娘と結婚して婿養子となり「**高橋文吾**」から「**山本文吾**」となりま
した。ちょっと脱線すると私は「**山本哲照**」ではなく「**高橋哲照**」だったかも
しれないわけでどちらの姓でも日本の「姓（苗字）」の中でベストテン入りする
ありふれた姓（苗字）だったわけです。

父は最初の妻を病で亡くし、**妻の妹の私の母と再婚**して1男（私）3女を設
け、私が**城山中学校3年生**だった1955年（昭和30年）6月に**68歳**で亡
くなりました。母は横浜の大工の棟梁の娘で再婚だった父とは**20歳の年齢差**
がありました。私は父が**53歳**、母が**34歳**の時の子供です。生まれた時から
実感として父は祖父のように感じていました。小学校の時も中学校の時もほと
んど会話らしい会話はなく、家ではいつもしかめっ面でタバコばかり吸って
いた親父でした。父の剣道の流派が「**小野派一刀流**」だったこと、**明治神宮競技
大会で優勝**したことなどは父との数少ない会話の中で聞かされ、未だに覚えて
いることです。ただ、警察という組織の中で剣道の稽古に励んでいた父ともう
少し会話ができていたら、「**智・仁・勇**」を標語に「**礼に始まって礼に終る**」

日本武道の心得などについて父から学ぶことは多かったのではないかと思います。父の故郷である石巻にはもともと全く親戚づきあいをしてきた家はなく、母の故郷の横浜には多くの親戚がいましたが今生き残っているのは私より7歳若い従弟ただ一人で、父のことは私よりも知らないと言っていていいでしょう。家族や親戚に父のことを知っている人はもはや一人もなく、警察にはそれなりに記録は残っているかもしれませんが、70年も前に退職してその後死亡した職員のことを知りたいというのはやはり気が引けます。

ネット検索の一つ目にヒット！

とつおいつ考えているうちに「そうだ！今はインターネットと言う便利なツールがあるじゃないか！」と思い付きました。そこで「明治神宮競技大会」「剣道」「山本文吾」という三つのキーワードで検索してみました。すると何と最初から探していたページが画面に出てきてスクロールしているうちに「第2回大会の競技結果の表に行き当たり、父の名が優勝者としてはっきり表示されているのを発見しました。「明治神宮競技大会」というのは今の「国民体育大会（国体）」の前身だそうでこの大会で優勝するというは大変名誉で重いことなのではないかと思います。ただ、このことを父母から聞かされた10歳前後の私は「親父が所属している警察組織の中の剣道の大会で優勝したのか？」くらいにしか考えていませんでした。まさか今の国体に相当する大会でそのクラスに出場した**全国の代表者の頂点に立った**のだとは思いませんでした。私はしばし茫然としてしまいました。父に対して「申し訳ない」と言う気持ちでした。この大会と優勝と言う結果を正しく認識していなかったことと何故こんな簡単なネット検索と言うことをもっと以前に試みてこなかったのか？ということに対してです。私が自宅でパソコンを始めたのは今から40年も前のことです。インターネットの時代になってからも30年近く経過しています。世の中の諸事万端ネットで調べられないことはないといっても過言ではありません。本気で調べれば10数年も前に父のことは分っていたでしょう。やはり私がきちんとした**男同士としての会話ができる年齢になる前に世を去ってしまった父に、懐かしいという感情を私自身が持っていなかった**のかもしれませんが。酒は一滴も飲めず家ではいつもタバコをくわえ、趣味だった囲碁を並べていました。子供（私ともっと幼い二人の妹）たちと遊んだり、話をしたりということは殆どありませんでした。父が亡くなった時私は中3になっていたので**まだしも、妹たちは10歳と5歳**でした。私以上に父親との親子らしい交流はなかったのです。その二人の妹たちは既にこの世の人ではありません。父のことをどう思っているのかもはや聞くすべはありません。「親父が若い頃剣道の全国大会で優勝したんだよ」と教えておきたかった・・・

第 2 回[編集]

名称: 第 2 回明治神宮競技大会

主催: 内務省

期日: 1925 年(大正 14 年)10 月 31 日から 11 月 3 日

会場: 明治神宮外苑 日本青年館講堂

部門	優勝	第 2 位
<u>青年団優勝試合</u>	<u>東京府</u> (6 点) ^[1]	<u>山口県</u> 、 <u>秋田県</u> (4 点)
<u>青年団個人優勝試合</u>	高山時之助(<u>東京府</u>)	藤本光治(<u>山口県</u>)
<u>在郷軍人軍刀術優勝試合</u>	斎藤角太郎(<u>青森支部</u>)	森田文蔵(<u>奉天支部</u>)
<u>中等学校選手優勝試合</u>	桜井泰三郎(<u>福島商業</u>)	舟久保四郎(<u>豊島師範</u>)
<u>大学、高専校優勝試合</u>	岡村健二(<u>山口高商</u>)	館野覚治(<u>浦和高校</u>)
25 歳以下一般優勝試合	渡辺喜久男(<u>山梨県</u>)	菅原松三郎(<u>宮城県</u>)
35 歳以下一般優勝試合	荒木敬二(<u>東京府</u>)	八木楨衛(<u>群馬県</u>)
36 歳以上一般優勝試合	山本文吾(<u>神奈川県</u>)	芦田長一(<u>島根県</u>)
<u>現役陸海軍人優勝試合</u>	加藤文一(<u>戸山学校</u>)	青木定次郎(<u>戸山学校</u>)

これは「ウィキペディア」に掲載された「明治神宮競技大会剣道競技」の中で第 2 回大会の競技結果をコピーしたものです。表の下から二つ目「36 歳以上一般優勝試合」の優勝者「山本文吾 (神奈川県)」が私の父です。この時 37 歳でした。

戸籍調べの項で述べたように父は昭和30年（1955年）6月に満68歳で亡くなりました。奇しくも今年2023年は父が亡くなってからちょうど68年経過したことになります。私は父の死後父が生きていたのと同じ時間を生きてきたことになるわけです。この稿を起こすきっかけになったのは「広島of 剣豪」との交流ですが、この年数の偶然を見ると父の何らかの意図が働いているのかもしれない。

「親父よ！23年前にはお袋、12年前にはすぐ下の妹、3年前には一番下の妹がそちらに行ってしまったがみんなに会えたのかい？姉貴とオレは幸い健康に恵まれ、病気もせず何とか今でも生きているよ。けれど二人とも間違いなく年を取り、そちらに行くのもそう遠い先ではなさそうだ。そろそろ二人を迎える準備をしてくれ。あまりに年が離れていて父親らしい親近感がなく、親父との思い出が一つも残っていないのが残念でならないがあの世ではもっと家族らしい生活がしたいね。それじゃあバイバイ！」

オレが子供だった時にさっさとあの世へ行ってしまった親父殿へ

貴方の不肖の息子 哲照

2023年11月15日（水）

～完～